

35. 『絵本通宝志』・「撰津国各郡農具略図」

このついでにこれまでしばしば引用した『絵本通宝志』と「撰津国各郡農具略図」も紹介しておこう。撰津市域の江戸～明治時代の農具を知る、いい史料である。

作者は大坂の絵師

A は『絵本通宝志』(1729)の表紙と扉で、「畫師浪速 橋有税」とあるように、作者は大坂の画壇で活躍した橋守国(1679～1748)。江戸時代の絵師の家元、狩野探幽の高弟鶴沢探山に学び、四天王寺を描いた屏風も残す本格的な技量をもった画家である。

狩野派から破門

狩野派は幕府や大名、寺院の障子・屏風を描くお抱えの御用絵師。画壇では最大の流派で、多様な注文に応えるため下絵になる絵手本を師匠から弟子へと伝えていた。ところが守国はこともあろうに狩野派の絵手本を出版したため破門されたという。いわば企業秘密をマスメディアで公開したわけで、おかげで糊口をしのげた町絵師からは大歓迎をうけた。守国は一生に20種近い絵手本を出版、庶民の中に生きた町絵師であった。

大坂近郊農村のスケッチか

『絵本通宝志』は10巻編成で第1巻の「四時農業」が稲作の1年を15場面に描く。稲作の1年を描くのは中国の「耕織図」の影響であるが、狩野派のように中国の手本で描くのではなく、大坂近郊の農村をスケッチしたらしく、大阪の民具とはよく一致する。

手本は全国で活用

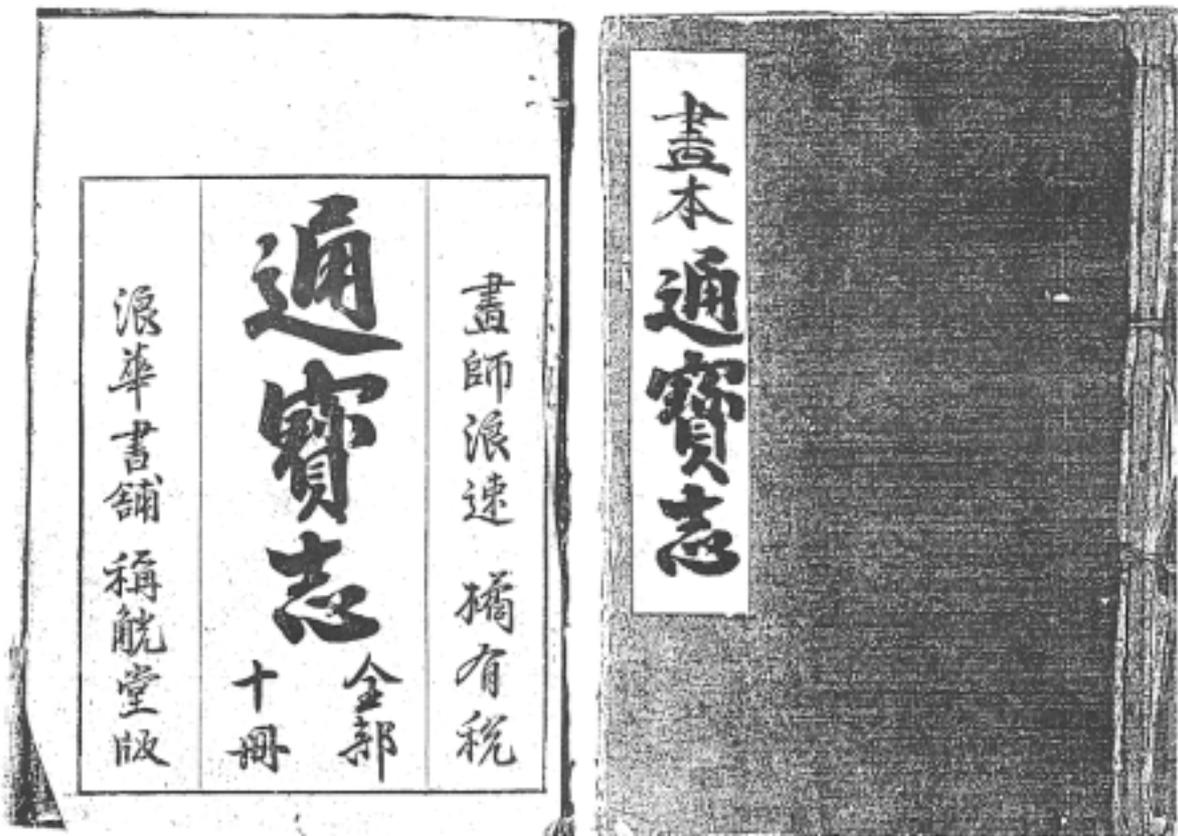
先年『絵本通宝志』を種本にした作品をチェックしてみたところ、佐賀県から福島県にいたるまで15点におよび、分野も絵馬・屏風絵から農業技術書の扉絵、美人画の背景、はては伊勢の津藩の藩札(紙幣)のデザインにまで借用されている。守国は出版というメディアを最大限に活用した新時代の絵師であり、近世大坂はそうした文化情報の発信源であった。撰津市域のご先祖たちも、この文化シャワーを浴びて暮らしていたに違いない。

「撰津国各郡農具略図」

B は「撰津国各郡農具略図」で、明治13年(1880)頃の作。大阪府立図書館蔵。大阪の民具学の草分け、故小谷方明氏が早くから注目し紹介してきた資料。当時の大阪府は、大阪市域の東・西・南・北の4区と、東成・西成・住吉・島上・島下・豊島・能勢の7郡からなっており、その府下7郡の農具図で、復刻が望まれる貴重な史料。

明治政府は初め欧米の農具を導入しようとしたが日本の稲作に合わずに失敗。在来農法の見直しを始め、内国勸業博覧会などに向け各府県の農具絵図を作らせたのである。

A



B

